真の「無災害」運動を

鉱山保安週間〝を迎えて

保安委員　松岡大喜

七月一日よりの〝全国鉱山保安週間〟を前に、去る六月二十二日のこと、保安委員会が開かれました。

席上、五月の、三池における負傷報告が、速報として、事務局の方よりなされました。

各鉱とも、五月は負傷者数が、新記録を達成したということでした。が、残念ながら、五月十五日に、宮浦鉱で、三井建設の黒木さんの死亡災害がありましたので、全鉱的規模では、新記録にはなりません。

しかし、数的には死亡一名、重傷十六名、軽傷六名、計二十三名。それに、微傷九十一名となっています。稼動人員延べ千人当りでも、〇・一人台の記録です。

とくに四山鉱においては、軽傷以上一名（微傷三十名）、稼動人員延べでは〇・〇二五人という、驚くべき記録です。

保安部預りは、原則的に一週間以内で現場に復帰できることとなっています。

さらに、四山鉱における微傷の三十件を、医師の診断書（負傷現認証）に見ますと、休業見込み十日以上三名、三日以上十一名、二日以内五名、ゼロ日十一名、計三十名となっています。

医者の診断書は、軽傷（休業三日以上）は十四名増しになります。もちろん休業見込みですから、見込みより長く休むことの方とそ、多い例のはずです。あくまで「災害ゼロ」こそ目的に違いはありませんが。

以上に一つの問題点を明らかにして、この一日からの鉱所保安週間に、真の「無災害」を実現し、楽しい家庭生活ができるよう、ともにがんばろうではありませんか。

×　×

微傷（保安部預り）各鉱4、5月実数

		微傷数	保安部預り
浦	4月	27件	15件
	5月	32	27
山	4月	31	28
	5月	30	24
川	4月	19	14
	5月	29	21
合計	4月	77	57
	5月	91	72

「災害ゼロ。目標達成を」（くろだいや新聞…社内報）

三池炭鉱で災害が少くなり、ケガ人が減ることは、私たち保安担当者として喜ぶべきことです。本当に三池炭鉱の坑内が安全で、楽しい職場であるように祈りながら、一人の負傷者もでないようにと思って、努力しています。

ですが、あまり記録のみに重点を置けば、「災害ゼロ」をめざして、「全鉱一致で目標達成を」ということで、目標達成に努力するあまり、負傷者に責任を転嫁して追及することとなり、入院患者を、二日間でベッドよりひきずりおろし（三日以上の休業は、記録に書きとめなければならないことになっている）て、「保安部預り」という名目で、保安部に出勤させることにもなりかねず、こんなことのないようにしたいものです。

保安委員会の中で、三池労組の各委員が追及しました微傷関係で明らかになりました事実があります。別表でわかる通り、微傷七〇～八〇%が保安部預りといった実態です。

保安部預りは、原則的に一週間以内で現場に復帰できることとなっています。

さらに、四山鉱における微傷の三十件を、医師の診断書（負傷現認証）に見ますと、休業見込み十日以上三名、三日以上十一名、二日以内五名、ゼロ日十一名、計三十名となっています。

医者の診断書は、軽傷（休業三日以上）は十四名増しになります。もちろん休業見込みですから、見込みより長く休むことの方とそ、多い例のはずです。あくまで「災害ゼロ」こそ目的に違いはありませんが。

以上に一つの問題点を明らかにして、この一日からの鉱所保安週間に、真の「無災害」を実現し、楽しい家庭生活ができるよう、ともにがんばろうではありませんか。

×　×

恥知らずな〝くろだいや新聞〟（社内版）

初夏の小岱山へ……

――組でハイキング――

三川　杉本一男

さる五月五日の日曜日。連休を利用して、開発常一番（三川指導部七分会のひとつの組である開発部内）では小岱山ハイクにでかけました。

まえまえから話しが出ていたのですが、日程や場所が決まらずにいたのが、春闘も終り、たまたま連休ということで急に決まったのです。

小岱山なら、いわば地元ではあるし金もかからない。旅行などと違い気軽に行ける。幸い時期もよしということで、一発でまとまりました。

前日からの雨もようで、ちょっと天候が心配されましたが、午前十時府本登山口に集まったころから絶好の登山日和になってほっとする。

組としては、病気の人もいて全員参加はできませんでしたが、飛入りが三名あり一行十名。ヤッケに登山靴と本格派から、背広に革靴という正装？　はては雨具持参の慎重派まで、ワイワイ、ガヤガヤで出発です。

初めて小岱山に登るという者、十数年ぶりだという者で、みんな案外登山していないようだす。登山口からしばらくは舗装路がつづく。以前は小さな田舎道だったのに、周辺には新築された家などが多くなっていて、世間なみの変りようがここにもあります。

一直線のコースをとったので、再建中の真言宗正法寺や、中国人朝鮮人殉難の碑などを訪ねることはできなかったのですが、やがて古くからの史跡や古墳にいろどられた山のふんいきのなかに入っていきます。

ワラビやゼンマイ、山つつじに無数の自然木のなかの細い山道は岩肌が出ていてかなりきつい。それでもみんな汗を出しながら「空気がうまい」「坑内の汗とちがうあ」との声も出ました。

途中、マイカーやバイクともすれちがい、工事のためのダンプも乗り入れられています。中腹まできて、汗がにじめ、呼吸も荒くなってくる。さすがに三十代一人あとは四十代以上とあって笑談を多くなっていて、世間なみの変りようがここにもあります。

いよいよ昔？のままの登山路へさしかかり、登るほどに目が射してきて、汗がにじめ、呼吸も荒くなってくる。さすがに三十代一人あとは四十代以上とあって笑談を多くなっていて、世間なみの変りようがここにもあります。

小岱耶馬渓といわれるのはどの辺りであろうか。小さな滝や渓流を過ぎ、冷い水を汲んで小休止、いよいよ頂上にかかる。小さな子供たちは四、五才、元気なのにびっくり。

この辺りで先導するはずのA君がわき道を「わが道を往く」ように方向転換。のちのちの話題となりました。約五十分で頂上着。新しくできた展望台で裸になって汗を拭い、深呼吸。持参の双眼鏡で長洲、玉名、有明海をへだてて雲仙岳を眺望する。「今日は仕事の話はせんぞ」ということで、早速乾杯。車座になって日ごろのうっぷんを晴らすかのように、大きな笑い声が飛び交いました。だれも写真機を持ってきていなかったのが残念でした。

ともあれ、この一日のハイクは一般の清涼剤でした。秋にはまた計画しようということになり、いい気分で下山にかかりました。

土呂久からのうったえ

明日なき苦しみの被害者たち

鉱害に苦しむ土呂久の患者

土呂久鉱山の歴史は古い。発祥は、戦国時代（一五五〇年ごろ）で、銀を主として、銅・錫なども産出し、鉱脈も豊かであった。

江戸時代になると、佐渡の金山、石見・但馬の銀山とともに最も格式ある〝かなやま〟として知られ、明治の中期ごろより亜と鉱山へとかわっていった。

亜と焼は、昭和三十七年に鉱脈を掘り尽して閉山するまでの約半世紀の間産出されたヒ素の量は、三千トン（〇・一グラムで致死量という猛毒だから、三百億人の人間を殺害できる）にものぼる。

そのヒ素は大阪方面へ送られ主に殺虫剤の原料となったが、戦時中には毒ガスの材料としても使われたといわれる。

操業当時、ヒ素を含んだ毒煙は土呂久全域をすっぽりとおおい、その影響で作物は枯死し、家畜は狂い死ぬなど被害は甚大であった。それが、人間に無害であろうはずがない。

数多くの住民が毒煙のために目はただれ、鼻もただれ、そして神経を、内臓を、呼吸器を冒され、苦しみもがき、ついには血を吐いて死んでいった。

「私の母は鉱山で働いていたんですが、頭じゅう、ツのようなものができて、そこから血が流れすでく苦しみました。母はその苦しみからのがれるために鉱山をやめ、家にひっこんでしまいましたが、とうとう苦しみからのがれきれぬまま、死んでしまいました」

被害者の証言から、当時の悲惨な状況がうかがえます。

昭和四十六年、岩戸小学校の斉藤正健教諭の告発により、土呂久公害の悲惨な実態が表面化し、国も対策に乗り出しました。土呂久地区を公害地域に指定し、被害者を認定し、知事があっせんにはいって、鉱業権者である住友金属鉱山と被害者の間に、公害被害に対する補償交渉が行なわれました。しかし、どれひとつとってみても、被害者に納得のいくものはありません。

認定基準の問題　被害者の多くが気管支、神経痛、内臓疾患、皮膚、目、鼻、その他いくつもの症状で苦しんでいるのに、国は、認定基準を皮膚と鼻の症状のみにしぼっています。国は多くの人々を、見殺しにしようとしているのです。

補償交渉の問題　あっせんをかって出た知事が企業と結託して、被害者の要求を無視し企業の示した金額を、無理やりに被害者に押しつけるようなあっせんを行なっています。

このような行政当局に、被害者の救済を任せていたのでは、被害者の心の安まる日は遠くなるばかりです。

今年三月〝土呂久・松尾鉱毒被害者を守る会〟が発足しました。ひとりでも多くの皆さんに加入していただき、ともに被害者救済に立ちあがって下さるよう呼びかけます。被害者は、もう待てないのです。

×

先ほど来組した、全電通高千穂分会の吉村さんから送られてきたもので〝土呂久・松尾鉱毒被害者を守る会〟の連絡先は、「宮崎市平和ケ丘北町六―三、田中初穂さん（事務局長）」です。ともに手をつないで、闘っていきましょう。

おわび

右の資料のほかにも、たくさん三池に対する感想などを送っていただきました。また、別のところからもいろんなご感想・ご希望が寄せられています。紙面の限度から割愛せざるを得ませんでしたが、記してお礼にかえさせていただきます。

編集部